

どのようにかかわっていったのか、F子の日記の抜粋と共に記す。

日記を書かせる上で次のことに配慮した。

- 書く日は固定せず、心に感じるがあった日に書く。
- 内容は自由記述とする。これは毎日書かなければならないという圧迫感を感じさせないためである。担任は可能な限り感想を書いて、遅くても翌日には返すように心がけた。

(2) 実践内容

F子は、持ち上がりの児童で、学習面での遅れが目立った。また、休み時間も友人と遊べないなど全般的に消極的な学校生活を送っていた。家庭に帰ってからも、同級生とは遊べないで、1年生の妹やその友人と遊ぶことが多かった。

① 意欲を高める（4月8日）

担任のA教諭は、2年生に進級したこの機をとらえ、「毎日ではなくてよいから心に感じたことがあったら、日記に書きましょう。」と指導した。

F子は、日記の第1ページの「2年生になってがんばること」に

じぶんは1年生のときは、がんばらなかったけれど、2年生になったのだからこくごをいっしょうけんめいがんばってわかるようになりたい。

と今年の勉強への決意を強く示している。

担任は、「きっとできるようになるよ。あせらないで一つ一つできるようにしていこうね」と日記の行末に記し、F子の勉強ができるようになりたいとの願いがかなうよう具体的に方法を示しながら励ましている。

② F子のよくなった点を紹介する（7月9日）

くものすにとんぼがかかりしんでいた。かわいそうなのでおはかをつくってうめ、花をかざってやったら、こころのなかでとんぼがいきているようにもった。

この日記を翌日の朝の会で全員に読み聞かせ、「心の中で生きている」という表現の中に「Fちゃんの温かい気持ちがトンボに通じ、Fちゃんの心の中にトンボがそっと生きている」と紹介する。

この紹介は、F子の視点のよさを級友に認識させ、F子に対する評価を変えている。

③ 自信を持たせる（9月30日）

今までのF子は、他人に教えることなどなかったが、1年生のN子に鉄棒を教えられるようにした。

このことを日記で知ったA教諭は、F子に今必要なことは、学習・生活全般に自信を持たせることであると考えた。

「Fちゃんは、読み方が上手になったと思ったら鉄棒も教えられるようになったんだ。やっぱり、本当の2年生になったよ。」と、自信を持たせている。

④ さりげなく「言葉かけ」をする

（11月1日）

F子は、声がきれいであることを認められ、グループの中心になって音楽発表会に出場した。その喜びを日記に書いた。

昼休み教室でF子に、楽しそうに歌っている写真を見せ、「Fちゃんが誰よりも口を大きく開けていたよ。そして一番よかったのは笑った顔がとても可愛かったよ」とA教諭はさりげなく言葉かけた。その言葉にF子は満足した。



（音楽発表会の様子）

⑤ 成長を認めほめる（11月13日）

日記で思ったことは、日記がじょうずになりました。・・・ベンキょうをおぼえてた